

〔座談会〕

金門島研究の魅力と課題

出席者 陳 來幸（兵庫県立大学経済学部）

貴志俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

司会 川島 真（東京大学大学院総合文化研究科）

収録日 二〇一〇年六月一九日

特集の背景——金門学

川島 このたび『地域研究』にて金門研究を集集することになりました。台湾では、金門学という言葉があるほど、金門島が注目されています。それは、面積が一五〇平方キロ、人口一〇万弱しかないこの島が、台湾のみならず、東アジアにおいてきわめて特徴的な歴史世界を形成しているからだと思います。ただ、それと同時にその歴史世界が、孤立した、閉じた空間だというのではなくて、他の地域と

深く関わり、また他の地域に対しても参照価値のある、いわば広い空間に開かれているからだということもできます。そのような島のあり方が、知的刺激に満ちているため、多くの研究者を惹きつけているのでしょう。また、金門島内部でも、国際政治の変容と中国の台頭、あるいは台湾の経済発展や民主化を背景として、あらためて自らのアイデンティティを確立していこうとする傾向があります。それが、金門島民自身が金門学を推進するという、地域密着型の『地域学』のあり方を提案しているようにも見えます。

私は、このような金門に惹きこまれ、頻繁にこの島を訪れるようになり、この金門島を、またこの金門島を対象と

する金門学を、ぜひこの『地域研究』で紹介したいと思うようになりました。特集では、まず国立金門大学にて「金門学」を長く提唱され、御専門の建築史の観点から島の建築物や街路設計などについて多くの論考を発表され、昨今は海外に展開した金門出身者のコミュニティにて調査を展開しておられる江柏煒教授に御寄稿いただきました。また、著書『冷戦島——前線としての金門（Cold War island: Quemoy on the front line）』（Cambridge, UK: New York: Cambridge University Press, 2008）にて、冷戦という国際政治の大枠からではなく、島の内側から冷戦の意味を描き出し、世界に対して金門島の研究対象としての魅力を紹介した、ハーヴァード大学のマイケル・スゾーニ（Michael Szonyi）教授にも御寄稿いただきました。そして、お二人の論考が戦後を対象にしておられるので、僑郷（華僑の出身地）としての金門の姿を紹介した、川島の論考を採録してあります。

今日は、特集を組むにあたり、研究対象としても、またご自身のルーツとしても金門島に深い御縁をお持ちの陳来幸さん、そして早くから金門島研究の可能性に注目され、島を訪ずれていらっしゃる地域研の貴志俊彦さんとともに金門島のこと、また金門島を地域研究の対象として取り上げる意味について考えたいと思います。まず、お二人それぞれから金門島に対して持っているイメージ、あるいは、

研究対象としての可能性についてお話をいただければと思います。陳さんに口火を切っていただければと思います。お願いします。

金門との関わり

陳 そうですね、私自身が日本生まれの三世華僑なので、神戸の中華同文学校に通っていた小中学生の頃の友人に「私は金門出身だ」という人たちがいました。それが私にとっての金門との接点の始まりでしょう。友人たちとの間



陳 来幸（ちん・らいこう） 東アジア社会経済史。華僑華人史。博士（文学）。日本や朝鮮半島を含む北東アジア、東南アジア、アメリカ大陸諸地域の華僑社会を結びつける中華総商会制度を研究している。近代日本の華僑社会の始まりに注目するなか、神戸福建会館の王家や黄家、長崎の陳家など金門人の役割がきわめて重要であることに気づく。近年、金門を結節点とする世界に広がる華人ネットワークの営みに関心を持っている。

では、福建人、台湾人、広東人のくくりはありましたが、省より先の県や鎮や村の名前まで知っている人は多くはありませんでした。ただ、祖父母や親戚たちの会話から「キンムンラン（金門人）」という言葉の響きは鮮明に耳に残っています。その頃の、私にとつての「キンムンラン」のイメージはといえば、明らかに福建人でした。

川島 キンムンランは、とくに神戸に多いんですか。

貴志 長崎もそうでしょう。

陳 長崎からやってきて神戸に住むようになったようです。神戸では、金門出身者といえば、いくつかの名家が知られていますが、最初にあがるのが王敬祥一族です。王敬祥は、中華革命党の神戸大阪支部長でもあつて、孫文を支援したことで知られています。王家は、王敬祥さんのお父さん王明玉の時代に、長崎経由で神戸にやってきたといわれています。それから、長崎泰益号です。今は五代目の陳東華さんの代になっています。陳一族も多くが神戸に住みついています。この長崎の陳家も金門出身です。我が家も、遠くはありますが、両家と姻戚関係があります。

私が華僑華人の研究をするようになってから、長崎へ行って陳東華さん（泰益興産・JALシティホテル）の事務所で写真を見せてもらった時に、友人の祖父が映っていました。董運籌さん。現在の神戸福建会館理事長董国華さんのお父さんです。この時に、この董さんはもとも長崎



貴志俊彦（きし・としひこ） 東アジア地域史。修士（文学）。東アジアの地域間・都市間・集団間の政治経済学的な関係性を研究する。王敬祥文書や泰益号資料に関心を寄せるなかで出会った金門島の地域的特徴に興味を抱くようになり、2005年に初めて金門島を訪れた。近年は、金門島出身者を含め、「外国人」の情報コミュニケーションのあり方について研究を進めている。

の泰益号で勤めていた金門出身の方だと知りました。台湾からやってきた私の祖父陳通は、戦前もう一人の台湾人の蔡榮業さんとこの董さんと三人で一緒に泰安公司という貿易会社を興しました。現在は私の兄が継いでいます。金門人と、台湾人とは共同で出資して事業を始めたというなど、緊密につながっているのだと知りました。

川島 ありがとうございます。今でも金門島ともつながりがあるようなアイデンティティをお持ちなのでしょうか。それとも、海外にいる金門人、金門出身者という感じでしょうか。

陳 特別な金門島意識はないように思います。

川島 ありがとうございます。それでは、貴志さんにお願
いいたします。

貴志 私が金門に関心を持ったのは、今、陳さんにご紹介
いただいた王敬祥の文書や、泰益号の残した膨大な資料を
通じてです。私が八年間進めてきた東アジアにおける外国
人の法的地位という科研プロジェクトの中で、二〇〇五年
の三月に立教大学の荒野泰典さん（日本近世史）や弘末雅
士さん（インドネシア近代史）と、一緒に金門島に行った
のが最初です。実際に行ってみますと、やはり日本で考え
ていた金門島とは違うな、という感じでした。金門島に行
くには、台湾の本島からだいたい飛行機で五〇分ぐらいか
かります。約三〇〇キロ弱あるのです。ようやく着いたと
思えば、もう向こうには廈門が見えます。地理空間として
は、限りなく中国大陸に近い。しかし、パスポート上は、
金門島の人々は中華民国といいますが、台湾のパスポート
なわけです。そういう重層的なところにありながら、同時
に金門島人は自分たちのアイデンティティをどう考えてい
るかという点、中国人でもないし、台湾人でもない、ある
種の独特な金門島人というアイデンティティを持っている
ということに大変驚いた次第です。彼らのアイデンティ
ティは、国家に帰属するわけではない、独自のもののよう
に思いました。

川島 なるほど。台湾で金門の人々は第五の族群とかいわ

れますね。私も同ような印象を持ちました。私は、この
数年間、福建、広東の沿岸部の、いわゆる華僑を生み出し
ている僑郷を歩くようにしています。世界遺産になった福
建の土楼や広東の碉楼などを見ていると、建物にしても何
にしても、ある程度金門と共通性を見出せます。もちろ
ん、中華人民共和国の統治している空間と、中華民国が
一〇〇年にわたって統治している金門が同じとはいいませ
ん。ただ、ある時期まではかなり似た、つまり移民を送り
出す地域としての共通性があるのだと感じました。ただ、
話を聞いていくと、金門は僑郷としては科挙官僚を多く輩
出したという特徴を持ちます。金門出身の官僚が台湾に赴
任することも多く、台湾に対しては優位性、優越性を感じ



写真1 福建省永定県の客家の土楼。2008
年、世界遺産に指定された（川島真撮影）。

ていた人がいたようです。

陳 私自身は金門に行ったことがないのですが、最初に島の姿を目にしたのは一九九六年でした。世界華僑華人研究学会（ISSCO）が廈門で開かれた時です。すでに廈門の方からの観光地になっていて、望遠鏡を「のぞいてごらん」といわれてみたのです。くわしくは覚えていませんが、「三民主義・統一中国」でしたか。大きなスローガンがレンズの向こうにはつきりと見えました。まだまだここには冷戦の遺物が残っていると感じました。

川島 廈門から見るとなると小金門だと思えますね。

僑郷としての金門

川島 福建の沿岸部は、海賊がたくさん出るような海上交通のひとつの中心で、漳州とその外島の廈門、さらにコロンス島や金門があったわけです。これらの地域は同時に僑郷でもありました。金門も例外ではなく、個々の村々はそれぞれ特定の移民先を持っていて、この村はブルネイ、この村はマレーのどこと決まっているのです。そして、それぞれの母村が僑報という新聞を発行して移民先に届けたりして、（公的）ネットワークを保っていたわけです。

貴志 面白いですね。だいたい一六八ぐらい村があるとい



写真2 金門西部の水頭の僑郷の風景。洋楼が多く残されている（川島真撮影）。

う中で、それぞれが出先地といいますが、ネットワークにつながる移民先を持っています。金門島は孤立した小さな島ではなくて、それがハブ的な拠点として広がりを持つ地域を形成している点に関心がありますね。

陳 それぞれの村の建物というのは、移民先の建築様式の影響を受けたようなイメージなのではないでしょうか。

川島 村ごとにどこまで違うかはつきりしませんが、現存している二〇世紀初頭の建築物は、コロニアルモダンの要素が強いと思われます。上海とは異なりますし、おそらくコロンス島とも違うのではないかと思います。金門では、東南アジアに移民していた人たちが、東南アジアではやっていない、バンガローがあるようなコロニアルモダンの様式



写真3 広東省開平県の碉樓のある風景。2007年、世界遺産に加えられた。僑滙で建てられた高層の碉樓が目立つ（川島真撮影）。

を持ち帰っています。そして、時にはタイルなどは日本製だったりしています。

貴志 彼らの住宅は、フィリピンとかマレーシアなどの華人社会のそれに似ていますね。上海のような近代的な建物ではなくて。

川島 おっしゃるとおりですね。そこで考えることは、上海のような近代と、金門島において展開した華僑送金（僑滙）に基づく、海外のコロニアルモダンの影響を受けた近代が全然違うということですね。おそらく中国政府や中国の地方政府が進めた近代もあるのでしょうか、それぞれ異なるのです。金門では、華僑がドネーションで学校をつくり、また衛生建設などをしたわけですね。そういうモダン

の姿には、非常に驚かされました。

陳 私がさきほど建物の様式を話題にしたのは、たとえば、今では世界遺産に指定されていますが、広東省開平県などでは、多くの人がアメリカに移民し、故郷に帰ってくるや、競って一風変わった建物を建てています。たとえば厦門近辺の晋江は、フィリピン華僑からバスケットボールがもちこまれ中国でも常に一番強いチームを輩出するようになったといえます。移民先から戻ってきた人たちによって、あるいはその後の人々の行き来によって、閩南や広東などの僑郷に、新しい要素がおびただしく流入したのではないのでしょうか。ただ、神戸に進出した金門島出身の王敬祥が、金門の王家のために造った建物は、まったく日本風というわけではないですね。

川島 ええ、華南風ですよ。

陳 純伝統的な華南風のを敢えて造ったとなると、移民先から必ずしも何か新しいものが入ってくるわけではないのかもしれませんが、ただ、日本との関係が、もし頻繁にずっと続いていたら、あるいは台湾のような畳の和室様式のような住宅が金門にもできたのかもしれないですね。

貴志 必ずしも、故郷に錦を飾るというシステムではないということ、強く思いました。出先で大金持ちになって、その財産を持って故郷に帰って名を成すことより、双方に資産を作りつつ、往来が続けられるのです。故郷に



写真4 金門の建築物の、見晴らし台になっている最上階部分。様式や意匠には、移民先からの影響が見てとれる（川島真撮影）。

完全に戻ることもあれば、また移民先に戻ることもありま
す。この往来の激しさが、彼らのネットワークの広がり
につながっていると感じました。

川島 この点ですと、ジェンダー的な理解が重要ですね。

かつて、金門島では、移民の多い時には、女性人口の方が
多かったわけです。男は島からほとんど出ていってしま
した。そして、島自体治安が悪かったようです。建物には見
張り台がありました。海賊が来るからでもありました。

陳 開平の碉楼と同じですね。やはり一階、二階は鉄の門
ですか。

川島 鉄の門です。金門の近代は、移民先からの送金とも
たらされる技術に支えられていました。明、清からの連続

性はもちろん認められますが、近代に入って送金が多くな
り、中国とは異なる技術がもたらされていたのだと思いま
す。

日本統治から冷戦の前線に

川島 その近代の繁栄を経て、一九三七年から日本の統治
に入ります。じつは日本統治下の金門島のことは、よくわ
かりません。汪政権による統治をとりつつ、日本側から
は、福大公司という会社が入って経営したことや、飛行場
建設、阿片の強制栽培が知られています。また、日本敗戦
直後の金門の新聞や雑誌は、日本のことを非常に悪く言
います。ただ、最近、聞き取りをすると国民党の方がひどい
という物語になっていたりします。

金門は日本との戦争を経て、一九四五年の一〇月二日に
中華民国の統治に戻ります。以後、『戦後復興』に向け
て、華僑からのドネーションが激増していくわけです。と
ころが、国共内戦の関連で徴兵制の問題が浮上します。金
門に戻ると徴兵にとられるかもしれないので、海外の男性
たちは金門に戻らずに、お金だけ送るのです。一九四九年
になると共産党から総攻撃を受けて戦場になります。それ
から、砲弾が降り注いだ一九五八年も含めて、四九年から

の一〇年間ぐらいいはかなり激しい戦争状態となります。

六〇年代に入って多少落ち着きますが、最新線状態は基本的に変わらず、一九九〇年代の頭にいたるまで戦場扱いでした。移動も制限されて貨幣も台湾本島と違う金門の貨幣が流通していました。開かれていた島が逆に管理下におかれたわけです。このような時代における僑郷としての姿が川島論文に描かれています。

貴志 そのほか、金門島には別の面白いテーマを残していると思います。第一に、太平洋戦争期と冷戦期といった戦時下の金門島の実態研究です。そして、第二に、これと関係することですが、従来の研究が太平洋戦争期・日中戦争期と戦後の冷戦期を分断しているのですが、金門島を研究すれば、じつは連続したひとつの流れであることが確認できるのではないかと、そうした研究視点が残っていると思います。まず、第一の点ですが、一九三七年の十一月から八年間にわたる日本占領期について、金門商會が台湾総督の出張事務所になるとか、金門県立中学校が日本金門守備隊の所在地になるとかいったことはあっても、統治の実態は依然不明です。じつは、金門島と台湾の相違点を考えるときに、一八九五年に日本の植民地となった台湾の経験と、一九三七年に占領統治されたという金門島の経験の比較検討が不可欠と考えています。第二の点について言いますと、冷戦期における金門島と日本の関わりです。一九四九

年に日本の根本博という軍人が、白団形成以前に国共内戦（中台戦争）に関与していくわけです。それで、根本の下であった吉川源三が横領事件をやって、当時の吉田茂内閣が野党に責められました。冷戦期の日本人は決して外と関わりがなかったのではないのです。戦争中の軍人たちの集団がこの金門に深くコミットしていたのです。この点は、門田隆将さんというノンフィクション作家が、最近、『この命、義に捧ぐ——台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』という本を集英社から出版されており、評判になっていますね。

川島 そうですね。あの本の出版に際しては、少しお手伝いしました。そういった日本人が戦後もいたということは、一九三〇年代からベトナム戦争ぐらいいまで東アジアが戦争期にあったということと関係があるのだと思っています。

貴志 そういうことです。つまり、東アジアや東南アジアでは、太平洋戦争期のHot Warから戦後のCold Warになったのではなく、ずっとHot Warだったのではないかといいことです。とくに金門島からは、このHot Warの姿を連続的に見られるのではないかと思うのです。

川島 沖縄が軍事基地化され、そして日本本土は平和国家といえながらも、一部の軍人はずっと最前線で武器を持ち続けていたわけですね。白団などはその代表です。



写真5 金門島の各地には現在でもさまざまな戦時のスローガンが残されている。「還我河山」は中国奪還を求める内容（川島真撮影）。

一九四五年で過去と未来が切れるという歴史観は修正を迫られるのではないかと思いますし、そういった日本の姿も金門を通じて描き出される面があるのだと思います。

陳 私は一九五六年生まれですが、神戸で過ごした小学校、中学校の時代はまさしく国共対立、中台対立という冷戦構造に華僑社会が巻き込まれた時期でした。どこの家族は中国系だ、どこの家族は台湾政府系だという、色眼鏡を持って見られていたことを、子どもなりに何となくわかっていった時代です。振り返ると、金門島でのこのような戦間行為がピークに達していたのが五〇年代の終わりです。冷戦構造が華僑社会に持ち込まれたのが六〇年代だったのだと、あらためて認識します。そのころ、神戸の金門出身者

はどういった心持ち、アイデンティティをもって、そういった冷戦構造、前線になった自分たちの故郷を眺めていたのでしょうか。実は、このことを関係者にあまり聞いたことがありません。実のところ、金門の人たちは多様で、北京政府を支持していた人も、台湾パスポートを持っていた人もいました。そういったことも皆さんがお元氣なうちに、あの当時に三〇代、四〇代だった人たちにインタビューしてみたいものです。

川島 今回掲載されるスズニー (Szonyi) 論文や江論文は、金門島が軍事最前線となり、まさに総動員体制下に置かれるようになった時期の歴史を扱っています。ジェンダーという切り口も、新鮮です。今回の論文には出てきませんが、江さんにはインドネシアやシンガポールの金門会館に関する著作があります。そこでの論点と陳さんの提示された論点は通じるものがあるように思います。

陳 そうですね、ホスト社会によっても華僑のおかれた状況は全く違ってくるでしょう。

川島 たとえば、華僑迫害で知られるインドネシアでも、インドネシア土着を選ぶ人、シンガポールや香港に逃げる人、金門に帰る人、そして金門が見える厦門に帰る人、いろいろな選択肢があったようです。それぞれ、ホスト社会との関係をふまえつつ、それぞれの思いで選択をしたのでしょう。これらのことは、今なら聞けるかもしれません。

パスポートもそれぞれ選んでいったはずですが、自分の故郷が戦場になっているわけですから、普通の華僑とは違う感覚を持っていたかもしれないですね。

金門により引き裂かれ／繋がる空間

貴志 戦後日本で金門島が意識されるようになったのは、一九六二年に「金門島に架ける橋」という映画が上映された時ではないでしょうか。日活と中映との合作映画です。この映画を通じて、日本人は初めて冷戦の最前線に金門島があることを実感したのだと思うんですね。ただし、日本



写真6 金門島から中国に対しては拡声器による宣伝が行われた。写真は馬山播音站(川島真撮影)。

と台湾で上映された映画のシナリオは異なっており、日本側で放映されたものは日本人に都合よく描いているし、台湾では結論が全然違うわけです。いわば金門島を象徴として、華僑社会内部が中国と台湾とに分断されただけではなく、こうした映画を通じて日本人と台湾人の間にも、それぞれ異なる心性が存在していたことを浮かび上がらせたように思います。

川島 それは、どういうふうに分かれるのですか。

貴志 もう少し具体的に言いますと、一九七二年の日中国交回復を契機として、日台断絶が起こり、華僑社会の中ではいづれの立場に立つかの踏み絵が敷かれるわけです。金門島人は、まさにその踏み絵を最初に踏まされることになる。一方、すでにそれ以前に、台湾人と日本人との間には、今日日本の市井で強調されるような両者の一体感、共鳴というような感情よりも、お互いに対する認識というか、シンパシーが分断されていたのではないのでしょうか。この点が、「金門島に架ける橋」という二つのシナリオを持つ映画の上映で顕在化したのではないかと、ということです。それゆえ、日本人からすれば、華僑社会の内部分裂はあまり関心がなく、また理解もできなかったのではないかと、いうことを言いたかったのです。もちろん、金門島人が抱える問題の複雑さには関心を持たなかったし、ある意味、いまだにそうした状況認識が続いているのではない



川島 真(かわしま・しん) アジア政治外交史。博士(文学)。2002年に最初に金門島を訪れて以来、その研究対象としての可能性に惹きつけられる。金門を訪問するうち、江柏煒教授に出会い、そのサポートの下で金門研究を始める。主に戦時体制下で断絶したとされる、僑郷としての金門と海外移民との関係について、連続性の観点から研究を進めている。また、近年は中国東南部の僑郷を巡ね歩いている。

かと思うのです。

川島 なるほど、そこに金門が絡んでくるんですね。そして、《『中華民国』の中でも、やはり今の台湾の人たちと金門島人が違う経験をしたわけです。もちろん、金門の最前線には台湾人の軍人がたくさんいました。それでも、台湾本土の社会と金門社会はやはり、三〇〜四〇年間にわたって分断されたのです。たとえば『認識台湾』という中学校向けの教科書がありました。そこで金門島は台湾ではないので四九年以前には出てきません。四九年以後の部分で戦場として少し出てくるだけです。台湾の民主化や台湾化は肯定的に捉えられがちですが、それによってもう一度台

湾化せず、台湾よりも民主化の遅れた金門島は他者化されます。蒋介石の頃も軍事最前線で他者化されて、台湾化の過程で再び他者化されたのです。金門は二重に台湾から他者化されたことになります。

貴志 そうですね。印象論的な話になりますが、台湾で二〇〇八年に馬英九政権が成立して以降、いま指摘された金門島が抱える二重性ゆえに、中台を結びつけるキー的な役割を果たすかもしれないという考えています。他者化されているがゆえに、台湾とも中国とも違う。そのために、金門島人は台湾社会にとって、一種のトリックスターになるかもしれないと思います。

川島 民進党の末期の頃、金門県長が金門を「特区」にするよう提唱したことがあります。中台交流の最前線になろうとする発想です。これは、現在の民進党代表の蔡英文が当時進めていた兩岸交流の成果だったともいえます。民進党政権は、中国との交流を限定的にして、金門をその窓口にしたわけです。そして、皮肉なことに、金門島の人々が支持する国民党の馬英九政権になると、中台間の交流がいつそう拡大して、台北から中国各地に飛行機がどんどん飛び始めたのです。そうなると、金門はもう素通りされてしまします。

貴志 そうなのです。

川島 金門は新党、あるいは国民党支持者が多く、民進党

にはほとんど票が入りません。それにもかかわらず、台湾と中国との関係がよくなればよくなるほど、交流の前線としてのプライオリティが失われるというアイロニーを抱えています。

軍事最前線の副産物

貴志 二〇〇五年に金門島へ行った時に、私たちは冷戦の最先端という古いイメージを持って行ったのですが、実際に現地で見にしたのは、景色が非常にきれいで、自然豊かであり、平穏な社会であったことでした。これには正直、驚きました。そのときピンときたのが朝鮮半島の三八度線のことでした。現在の金門島は、環境や生態系を研究する重要なスポットになっています。朝鮮半島を南北に分断する三八度線は、金門島と同じく、人が入れなかったために原始林エリアになっていて、自然が豊かな状態になっていますね。ここから、軍事的な緊張状態が人間を排斥して、かえって自然と人間社会の共生の在り方を問うているのではないか、また自然や環境に対して人間はいかなる役割をはたすべきなのかを考えずにはいられませんでした。

川島 もちろん基地そのものが持っている汚染性というのは強いわけで、一回基地になった場所は、なかなか他の目

的に使えませんが、他方で自然保存等、封鎖されている空間の副産物というものはあるわけですね。

貴志 そしてそれが観光資源になるのです。韓国でも、現在三八度線一帯は観光スポットになっています。一方、金門島にも、たくさん台湾人が観光に赴くわけです。台湾人は、豊かな自然を満喫したり、冷戦期の史跡めぐりみたいなことをしたりするために、金門島に押し寄せるのですね。そこには、緊張感がまったくないわけです。このように、観光産業やエコロジーという分野から地域を見る場合でも、金門島というのは、三八度線と同じようにユニークな研究対象となるのではないのでしょうか。

陳 私の場合は、その対立の犠牲であったり、あるいは特区というような話題が出てくる点で、沖縄、琉球との共通性というのをイメージしながら話を聞いていました。さらに、傷つけられた心性というものもあります。

川島 金門は一〇万人いた兵が五千に減りました。金門の緊張感の緩み方はそうとう早く進行了ようです。

貴志 これはまさに、この特集の論文にあるように、金門島を国際政治の対立の前線として見るだけではなくて、金門島に住んでいる人々の視点から金門島研究をしなければならぬという問題提起と繋がりますね。陳さんが指摘されたのは、やっぱりそこに関わってくる問題だと思っています。地域研究のあり方として、大所高所で俯瞰しているこ

とも大事だし、地に足がついた在地の視点も同様に重要であると思います。

川島 金門社会に即して考えると、世界に開かれ僑郷としての近代を体験し、台湾に対しても優位性を意識していた金門社会が、突然世界への扉を閉ざされ、そして島の人口以上の規模で駐留した中華民国国軍の兵士たちから、その金門社会のモダンが否定され、むしろ立ち遅れた文化のように見られたことは大きな衝撃であったように思います。

また、海外に出た金門の人々が味わった苦痛もあったと思います。そのような、物的、心的ストレスを与えられた人々が、軍事的緊張感が緩んでいく過程で、そして民主化過程で「自由化」されるとしたら、どのような意識を持つのでしょうか。

現在の海外の金門人ネットワーク

川島 目下の金門島では、包丁とか高粱酒、お菓子などの産業を持ちながらも、結局観光産業が中心になりつつあります。残された自然を国立公園にして維持し、僑郷であったことも観光資源にして昔の古い家も民宿にしています。自分のアイデンティティを否定されたような数十年間を経て、金門の人々は、台湾人とも中国人とも違う主張を始め

ているというのも確かです。

陳 海外ネットワークの復活は明らかにありますか？

貴志 あります。

川島 国立金門技術学院は、国立金門大学に昇格しましたが、この大学にもドネーションが多く寄せられています。

貴志 そして、金門学がこのように大きな存在になってきているというのも、ドネーションの力なしには考えられないわけです。大昔のように交易とかたちではないにしても、ドネーションで金門島が復活し、かつ脚光を浴びていると見ることもできるのです。学問だけでなく、むしろ新しい観光地や生態系のパラダイスとしての金門島というのは、ドネーションから息吹を与えられているとも考えられるわけです。

陳 金門島は非常に小さいところなのに、海による広がりがあります。おそらくどんな制度の時代であっても、かりに海禁の時代であろうと、いったんこの島に渡りさえすれば、さまざまに広がるネットワークの手がかりがあったのでしょうか。それこそ北は日本へ、南はシンガポールへと展開してゆくことができたのだと思います。小さな場所の持つ大きな広がりという点は面白いところです。人口は非常に少ないですね。

川島 現在は一〇万弱です。

陳 にもかかわらず金門人を自負する海外の華僑は数十万

です。そのギャップが面白いですね。

貴志 ちょっと古いデータかもしれませんが、シンガポールにいる金門系はだいたい一〇万です。マレーシア、インドネシアにも各一〇万ずつ。ブルネイは三万人以上で、ブルネイにいる華僑人口の七〇%が金門島出身者だそうです。そして、台湾に住む金門島出身者がだいたい三〇万。やはり金門島にいる金門人は、全体から見れば少数ということになります。

川島 そうですね。他にもインドネシアなどで迫害された金門出身者が避難した中国にも一定の人口がいます。

陳 私の持っている資料では、日本の金門出身者は三千人になっています。最近の急激な新華僑による華僑人口増加以前の段階で考えれば、日本の華僑の七%ぐらいを占めていたということになります。この割合は大きいですね。そのわりには、研究対象としては注目されてきませんでした。

市川信愛教授の金門研究

川島 日本の金門研究についてみれば、石田浩さんも金門に関心をお持ちでしたが、やはり市川信愛さんが金門華僑の研究のパイオニアだったと思うんです。市川さんの問題

関心や、当時の切り口はどうだったのでしょうか。

陳 市川さんは泰益号資料を通じて陳家を研究する中、晩年、金門華僑のネットワークに注目し、研究の方向性についても大きな野望を持っておられたようです。台湾でのシンポジウムにご一緒させていただいた時に、学際的な総合研究としての金門研究の面白さを力説されていました。たとえば、渡り鳥についての研究も面白い。地理学、民俗学の立場から「風獅爺」の研究も興味深い。そのほか、海洋学、水産学の立場からカブトガニの研究もありうるし、さらに、環境科学や地球物理学への広がりという点でも金門を素材にさまざまな発展がありうる、と指摘されていました。

川島 市川さんはある意味で壮大な研究計画をお持ちだったのですね。

陳 海外の研究者として、金門に調査に入ったのはおそらく自分が最初であるということ台湾の研究者の前でおっしゃっています。市川さんは、二〇〇〇年八月一日から八月三十一日までの一ヶ月、金門に調査に入りました。コミュニケーションネットワークとして「姓氏のネットワーク」に興味を持っておられました。台湾には金門経由で入ってきた人も多く、閩南系の人も多いのですが、台湾は日本によって五〇年間統治されました。中国的なものが残されてはいても日本の影響を受けて独特な世界を形成しているのが台湾



写真7 珠江の薛家の家廟。毎年12月に一族の祭りが行われる（川島真撮影）。

です。中国では、華南方面では姓氏、家廟等々が発達したけれども、文化大革命でかなりの破壊を受けました。このように考えれば、伝統的な中国的なるものそのものが残っている空間は、もはや金門しかないということになります。そして、単姓村がしっかりと残っていて、その宗族のネットワークを通じ海外に雄飛する。ある意味で海外移民パターンとしては典型的であったはずの形式が金門ではずっと存続していました。このような形で村落と海外とのネットワークが残されていることは今ではきわめて珍しいのではないかと、このような視点を強調しておられました。

貴志 このネットワークの問題は、ディシプリンとしての地域研究の問題に関わるように思います。私たちは、これ

まで日本は日本、東アジアは東アジア、東南アジアは東南アジアという地域研究、すなわち地域を区分した地域研究を進めてきたように思えます。しかし、金門島から見ると、先ほどの泰益号の問題と絡めて、金門島と中国の関係はもろろんのこと、金門島と日本や朝鮮半島との関係、金門島と台湾本島との関係、さらに金門島と東南アジアの関係といった、じつにいろいろな地域間の関係がクロスオーバーしつつそこに凝縮されていることがわかるわけです。

すなわち、金門島を核とすれば、今まで日本研究や東南アジア研究や東アジア研究として分断されていた地域研究のあり方が、あるコンテキストにより結びつけられていくような可能性が見えるのではないかと考えるのです。つまり、金門島を対象とすることで、地域研究自体が抱えているひとつの課題を、ある意味克服まではしないにしても、地域の相関関係を考えていくことができるのではないかと、思うのです。

川島 まったくそのとおりですね。非常にミクロなだけでなく、そこにマクロ的拡がりがある。そこが面白いのではないかとことです。ただ、難しいのは、華僑研究全体で見ただけの場合に、金門に何か特殊なことがあるのかということです。

華僑研究としての金門研究の特殊性

陳 やはり戦後、台湾（中華民国）に統治されていたということがありますね。ただ、今までの議論に基づく、日本との関係が特殊性として指摘できるように思います。大陸の福建や広東出身の日本華僑とは異なり、金門出身の福建人は日本統治時代の台湾人との結びつきを通じ、華僑社会の中でも独特の領域を形成していたようにも思われます。

川島 さきほどの市川信愛さんの議論にもあるように、文



図1 金門西部の珠山の『薛氏家譜』にある地図。一族が各地に展開しているさまを示している。

革の影響を受けずに、また軍事最前線であった結果（砲弾が降り注いだにしても）、一九世紀以来の華僑と僑郷の関係を、一定程度維持していると見ていいのかもしれない。

貴志 今の問題と関連して、金門島は海洋史や海域史の面からも考える対象として重要であるということです。小さく見れば、中台関係の中で金門島がひとつのハブになったり、あるいは同じように沖縄が東シナ海で、香港が南シナ海でひとつのハブになっているという姿です。これらはそれぞれ小海域のハブを示しているわけですが、香港から金門島、そして沖縄、さらに北東アジアを結ぶ広域ルートみたいなものを考えることもできます。ただ、これまでの海域研究では、アジアの一定の海域圏での考察に終わっていたのではないかとも思えます。しかし金門を見れば、世界へ広がっていたことに気づかされます。金門島を核とする広域ルートは、さらにフィリピンや、太平洋沿いにどんどん広がっていたのです。ある意味グローバルな活動を、彼らはしていたわけですね。こうなると、金門島研究は、東アジア研究や東南アジア研究という特定のエリアによる地域的枠組みではなくて、あらためてグローバルな視点から考えなおす方法論を考える必要があると思えます。特定の地域が、じつは世界の中にどのように位置づけられるかを、私たちは考えるべきであろう、というわけです。

川島 確かにそうですね。そして、香港も金門も沖縄も、そこに住む人は世界中に親戚がいるのですよね。今までの地域研究は、その地域の中に入り込んでいく研究が多くて、逆に開いていく研究があまり多くなかったのかなと感じます。

貴志 その点は非常に重要ですが、では金門島人は香港人や沖縄人と何が違っているのか、という問題は当然考えなければならぬ問題です。その時に、とくに重要なのは、ホスト社会から見るという視点だと思うのです。金門島人、香港人、沖縄人が移住先のホスト社会との関係でどのような共通性と差異性が存在するのか、それぞれ各国でどのようになっているか、という比較論的な調査や研究が必要だと思います。

川島 それと同時に、母村、つまり送り出す方の側のありようの違いというのがあるはずですが。もしかしたら香港人は個人ベースで移民するのに対して、金門島は基本的に宗族単位、まさに単姓村たる村単位で動いているのでしょうか。そういった違いを踏まえた上で、ホスト社会の状況が組み合わされば、総体が把握できると思います。

貴志 今までの華僑研究は、概して送り出す地域の側と送り出された華僑・華人たち、あるいは彼らの集団との関係しか見てこなかったわけですね。これからの金門島研究は、さらに先にいって、とくに東南アジアにおける華僑が土着

化して華僑アイデンティティさえも持ちえないということを見野に入れて、東アジアにおける華僑イメージと東南アジアに土着化した中国系移民との違いを意識した研究をしていくべきだと思うのです。このあたり、東京外国語大学の三尾裕子さんの研究が参考になります。三尾さんは、ホスト社会との関係を重視するがゆえに、土着化した中国系移民という観点から考察され、出身地域の文化や関係を強調する華僑という言葉を使いたがらないのです。

川島 この観点でいうと、たとえば台湾に居ついてしまった金門の人も土着化したものとして見る必要があるのかもしれない。もちろん、インドネシアなどと単純に比べられませんが、台湾社会に土着化したと思われる金門出身の人々も、いつも台湾社会に対して違和感を覚えていたのかもしれない。

台湾・日本における金門社会

陳 私自身の出身は台湾です。父方、母方の祖父母が全部で四人いるのですが、華僑研究に関わるようになって、初めて四人の祖父母のうち一人が金門出身だということがわかりました。二〇〇二年のことです。母方の祖母は新竹出身の鄭家で、その来歴は金門経由だったということがわか

りました。

川島 なるほど、それは名門ですね。

陳 外祖母自身が新竹鄭家の「進士第」のそばの「春光第」で生まれ育ったと聞いています。台湾籍最初の進士の一族だったということを台湾の友人の研究者から教えていただきました。今まで日本では母方の祖母は落ちぶれた貴族の出だ、と言い伝えられてきましたが、じつは祖先が進士だったのだと知りました。短期在外研究で台湾にしばらくいた時に、祖母のことを説明すると、「これが有名な鄭用錫だ」と鄭家に関する研究論文を下さいました。それを読んで初めて鄭氏は梧江出身だと知りました。この梧江が金門のことだったんですね（笑）。そこで、今でも「春光第」に住む外祖母の甥の嫁にあたるおばさんに会いにゆきました。ルーツを調べてみると、鄭家は明末に金門にやってきて、金門には三世代生活し、三代目の時に出嫁ぎで台湾にやってきたのです。四代目あたりで台湾に定着し、その次の代の用錫の時に最終の科挙試験に進んで合格して進士になった。台湾人の進士としては四番目なのだけど、台湾籍の進士としては最初の人だったということだそうです。そこから数えてさらに四代目ぐらいの時に日本にやってきているのです。ということで、私も金門ネットワークの一員に入るのか、ということが二〇〇二年になって初めてわかりました（笑）。

貴志 陳さんに前から伺いたかったのは、日本における華僑には、華人というアイデンティティと同時に、たとえば金門島人であるという出身地域へのこだわりが見え隠れしているように思います。華僑だけど金門島人なのだという自負ですが、神戸に育った華人としては、両者はどのような感覚で捉えられているのでしょうか。

陳 とくに金門島の方だから、ほかの出身とは違うという感覚は、子どもの時のつきあいの中ではまったく感じなかった。少なくとも私の世代では、ですが……。

貴志 やはり華僑の一部という感覚なんですか。神戸は、特殊な例に思えますが。

陳 そうですね。数ある華僑の出身地のひとつでしょう。自らの出身地が金門だということを記憶している華僑がどれだけいるでしょうか。私もいわば老華僑で、すでに来日三世、四世の世代です。この世代になると、とくに日本の華僑の場合、多くは出身省程度の認識しか持っていない。悲しいことですが、出身県や出身鎮に対する認識はほとんどありません。金門の地域研究が進められると、日本の華僑があらためて自らの出身地に目を向けていく契機になるかもしれません。華僑や移民の研究をしている私にして自分のルーツを知ったのは偶然のことからですから……。

川島 国立金門大学の方々をお招きして、神戸の金門出身

の方々と座談会を開くということもあるかもしれません。

陳 先ほど申し上げた王さんと陳さんには強烈な金門人アイデンティティがあります。

川島 金門大学では、金門出身者からドネーションを受けつつ、また彼らの子弟を僑生として受け入れています。

現在の金門の危機感と金門学

川島 いま金門学が金門島発の学問としても話題になっているのには、金門社会のある種の危機感が背景にあります。三通が始まって、いまや台北から中国各地に直行便が飛ぶようになりました。中国には一〇〇万の台湾人ビジネスマンが住んでおり、これからは大学生交流が始まります。そうなると、これまで中台交流のハブであった金門は、とつぜん周縁化してしまうわけです。中国、台湾が統一するにせよ、台湾が独立するにせよ、金門の立場は弱いわけです。そのような状況の下での金門の叫びがこの金門学につながっているように思います。もちろん、このようなアイデンティティ形成に深く関わった学問に、外にいる私たちがどの程度同調するかについては議論があるでしょうけれど、こういった主体性形成と学問の関わりじたいも研究対象だと思います。

貴志 金門では、一九九二年の十一月に戒嚴令が解除され、それからわずか一八年しかたっていないわけです。今後の金門島が、中台関係の中でいかに変わっていくかというに関心ありますよね。

川島 台湾の政局でいえば、当然ながら民進党政権の「伝統的」政策における金門は「台湾とは異なる存在」として位置づけられてしまうのですが、先に述べたとおり、現実的には、民進党になった方が対中国交流に抑制的になるので、逆に金門の重要性が浮かび上がります。主義主張としては、金門を切り離して台湾・澎湖だけでの独立をかつて掲げた民進党より国民党の方が金門にとっていいわけですが、現実的には国民党ならそれでいいというものでもないのです。あと、金門県政府からすれば財政の問題や若い人が外に出るといふ、どの離島にもあるような共通の課題を抱えています。それを、観光収入だけで補うのは無理なので、海外華僑からのドネーションで埋めようとしている面があります。

貴志 金門高粱は昔ほど生産されないし、売れてもいない。そうなると、もう観光で生きていくしかないだろうというところですね。それで、観光にも限界があるからドネーションに頼らざるをえないという地域事情があるのでしよう。

川島 あと、すぐ中国に船で行けますから、中国でもうけ

るということもあります。厦門に家を買って週末はそこに住み、そこで物を売ってすぐに帰ってくる人もいます。そういうふうに移動しながら稼ぐのは、昔ながらなのかもしれません。

貴志 日本の占領期や冷戦期と違って、今はいわば金門島が平時の正常な状態に戻ったという感じもするのですが。

地域研究の課題としての金門

川島 そろそろ、金門を対象とした地域研究の意義や課題についてまとめていきたいと思います。今日の座談会では多くの論点が出されました。第一に、俯瞰的な国際政治研究と、冷戦の前線としての金門の内側からその時代を扱ううとするスタイルの相違がありました。第二に、外に広がる金門島のネットワークを、華僑研究として見る場合と、ホスト社会の目線を加えて双方から捉えるという方法という論点もありました。第三に、東シナ海のハブとしての金門ということだけではなくて、世界に開かれた場として見ていくことがありました。とくにこの第三の点は、とかく研究対象としての「地域」を設定して、その内側へ内側へと向かおうとする地域研究を、外に開かせられないかという含意があったかと思います。みなさん、いかがでしょう

か。

貴志 金門島を研究対象とすることで、特定の地域を対象とした研究で重視する、地域の特殊性、文化の固有性を強調しすぎるという感覚といいますが、研究者が陥りがちなアプリオリな前提を打破はしないまでも、それを再考するための何か新しい問題提起ができるのではないかとという気がするんです。同時に、地域研究のもうひとつの問題性は、その地域の現在を重視しながらも、現状観察を基礎とするがために、地域が持つダイナミズムというか、地域そのものがどのように成立し変化してきたのかということを見落としがちな点にあると思います。金門島の研究は、このような点を再考する材料を提供しているように思うんです。実際、金門島の場合、前近代的な歴史研究、海域や交易史みたいなもの、あるいは華僑史みたいなものをきっちり把握しないと、地域研究としての金門島研究は成り立ちえないわけです。われわれが抱いているある種の地域観も同様で、戦後に成立した、日本、東アジア、東南アジア、あるいは台湾、中国、そういう地域区分による、いわば縦割り型の地域研究を克服していかないと、対象への切り口が生まれてこないように思うのです。いずれにせよ、あるトピックを通して地域の相関性を考察するタイプの地域研究を進めるためには、二〇世紀的な世界の中で多く見られる、地域をどんどん転々としていくさまざまなファクター

を含み込む、「超域」とか「境域」的な発想を地域研究に持ち込む必要性があることを、金門島という対象が示していると思います。

川島 それを、通婚圏とかでくくるのではなくて、ある地域にディープに入れば入るほど広がってくるという、その面白さですよね。

貴志 そうですね。だから、時間と空間に大きな広がりを持たせる地域研究を志す必要があるように思います。地域研究は、本来的に総合学問でもありますから、たんなる現状分析のための研究であってはいけないのです。私たちが、金門島研究を通じて考えるべきことは、戦後に設定された特定の地域からはみださない地域研究のあり方を突破していくか、その解決策を求める道筋を探ることだと思えます。この点は、北海道大学のスラブ研究センターが取り組んでいる「国境」研究は示唆にとむ研究事例ですね。

陳 金門島への迫り方として、私は華僑研究という面から考えてみたいと思います。華僑研究の立場から見た場合、今までの華僑研究のあり方というのは、もちろんすでに克服されている部分がありますが、中国にいかに関わったかという中国中心主義的な見方がひとつにあります。とくに華僑の力を利用しようという場合にその傾向が顕著になります。四九年以降、あるいは改革開放以降、僑郷に対してどれだけのドネーションがあったかということを見るわけ

です。それでは金門とは中国なのか、大陸なのか、という問いが出てきます。また、このような中国中心主義的な華僑研究のほかに、日本なら日本華僑史研究、アメリカならアメリカ華僑史研究という、自分たちはそのホスト社会の中でどう扱われてきたのか、これからどうあるべきなのか、必要最小限にしか中国との関係を語らない、ホスト社会に軸を置いた華僑研究も非常に多い。そこではシンガポールではシンガポール華人を話題にし、アメリカの華僑研究では、アメリカ華僑についてしか語りません。そんな中で、日本の華僑研究は、異なる地域の物の移動とともに、人の移動や交流についても多くを語るようになってきています。私自身も自覚的に比較研究を行うようにしています。このような状況を踏まえた上で、たとえば朝鮮半島の南と北、日本の中の台湾人と大陸出身華僑、そしてその背後にある国際政治との絡みなどを意識して、華僑たちのアイデンティティを研究すると、そこから大きな問題が見えてきます。ようやく北東アジアでの比較研究は緒につきつつありますが、このような中で金門に焦点を当てた場合、さらにさまざまに複雑に交差する問題が見えてくるように思います。金門を深く研究すればするほど視野がさまざまな地域へと広がっていくと同時に、そこで織りなすアイデンティティの錯綜性が見えてくるでしょう。金門研究は面白い議論が可能な地域的、歴史的空間を持っているよ

うに思います。

川島 私の場合は、金門が閉じたひとつの歴史世界であると同時に、それが開かれるという点に注目したいと思います。その特徴を与えているのが、金門社会が歴史的に体験してきた、個々の時代の状況の積み重ねなわけです。そうした歴史性を丁寧に把握してこそ、金門島をひとつの地域としてとらまえることができるでしょう。ただ、そこで留意すべきは、個々の時代を把握するに際して、学問的な方法論が異なってしまうのではないかと思います。現地社会に即するにしても、学問的には引き裂かれた領域を横断していかないと、金門社会を紡げないと思います。しかし、それこそが本来は地域研究の醍醐味であつたはずです。

また、金門の人々自身によるアイデンティティ形成の過程で紡ぎ出される内容も大切です。それらとは時には緊張感を孕むことがあるかもしれませんが、金門社会がいかに金門学を形成しつつあるかということもまた、研究対象であると思います。

貴志 いずれにせよ、まずは「金門へ行きましょう」ということが大切だと思います（笑）。まずは、金門島に立つて厦門を眺め、あるいは沖繩を感じ、そして香港をにらみ、米国や中国の影響力を感じつつ、そうした空間の中でフィールドワークをして、金門学を発展させるべきでしょう。

う。文献をやっていた私たちのような歴史研究者もその現場へ行き、そこで生活する人の話を聞き、そして空間というものを感じる、そういう作業が求められているのではないかと思います。私の科研では、この座談会に出席されているお二人といっしょに、インドネシア、シンガポールの金門華僑の調査に行く予定です。しかし、同時に、地域研究者もフィールドへ行くだけではなくて、やはり研究機関・行政機関で収集している、あの膨大な金門島出身者の僑報などの歴史的な資料を説き明かすことに意を注ぐ必要があります。金門島は、このようにフィールドワーカーと文献学者が協働作業を進めることを可能にする重要な研究対象であると、私は思います。

陳 私は自分自身が華僑なので敢えて申しますと、金門人あるいは金門幫に属しているという人たちのどれだけの人たちが、どれほど金門人という意識を持っているかという点について、はなはだ懐疑的だといわざるをえません。

貴志 それは国際比較をして検証していくべきですね。インドネシア、シンガポールの金門島人と、神戸にいる金門島人というか、金門人と称している人たちが、互いにどのようなにホスト社会への感情が違うのか、またアイデンティティが違うのかということを、もっと調査すべきですね。

川島 金門という島が空間としてあって、そこから金門人

が広がっていくとはいっても、金門という島が拡大していつているかどうかは何ともいえないでしょう。つまり、何代目かになればアイデンティティが薄まるかもしれませんが、でも薄まった人が金門人であることを再確認することもあるかもしれません。そういう変容がある中で広がったり消えたりする運動体のようなものとして考える方がいいかもしれません。

陳 たえばアメリカに行った台山（トイサン）人という意識と、金門人という意識とが、どう異なるかということにも通じます。

川島 とても興味深いのは、金門人自身が最近その金門人的アイデンティティを主体的に取り戻すべく運動を始めており、金門学を推進し、その影響が金門人の子孫である陳さんにも結果的に及んでいると見ることもできることです。これは、日本という地域を東アジアに落としこみ、広げていくひとつの契機でもあるのかもしれませんが。

陳 最近、金門大学の江さんが頑張っておられるわけですが、市川信愛さんが最後に台湾でお話しされた時には、金門学をまさに孤軍奮闘で取り組んでおられたという感じでした。そして市川さんが「ぜひ台湾の学生さんに金門にもっと注目してほしい」と言ったら、会議にいらした著名な某教授が「そんなに面白いと思うんだったら、あなた頑張らないさい」とつれなくおっしゃいました。そんな時代で

したね。

川島 いまや英語圏で金門研究の専著が出るほどです。この『地域研究』という雑誌で金門特集をしたのも、歴史の大きなある意味では固有性と広がりをもった金門、また地域的なアイデンティティを強く主張するその金門を、問題提起的に投げかけることによって、地域研究や東アジアを研究する諸ディシプリンの刺激になることがあればと思うからです。その意味で、今日の座談会はとても有意義なものになりました。どうもありがとうございました。